

日本統計学会会報

NO.113 / 2002. 10.18

発行 日本統計学会
東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-8569 Tel 03-3442-5801 Fax 03-3442-5924
編集責任一国友直人（理事長）／藤澤洋徳（庶務理事）
山口和範（広報理事）／宿久 洋（広報理事）
振替口座=00190-2 61361
銀行口座=みずほ銀行広尾支店普通1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 卷頭隨筆：「義務教育における統計教育」	井出 満…1
2. 新理事長就任挨拶	国友直人…3
3. 前理事長退任挨拶	小西貞則…3
4. 第7回日本統計学会賞について	4
4.1 第7回日本統計学会賞	4
4.2 受賞のことば	5
5. 新名誉会員の紹介	8
6. 日本統計学会小川研究奨励賞	9
6.1 対象論文および受賞者の報告…宮川雅巳…9	
6.2 小川研究奨励賞を受賞して…黒木 学…10	
7. 統計関連学会連合大会	10
7.1 統計関連学会連合大会実行委員長報告	
…廣津千尋…10	
7.2 プログラム編成委員会委員長報告	
…吉村 功…11	
7.3 市民講演会報告	岩崎 学…11
8. 「統計学・確率論とその関連分野についての	

第4回国際会議に出席して	景山三平…12
9. 会長候補者推薦のお願い	…14
10. 研究部会新設公募	…14
11. 研究分科会について	…15
11.1 日本統計学会研究分科会規程について	
…杉山高一…15	
11.2 研究分科会募集のお知らせ	…杉山高一…16
12. 科学研究費への応募促進について	
…竹村彰通、赤平昌文…16	
13. 2002・2003年度評議員選挙結果	…17
14. 韓国統計学会誌定期購読のお知らせ	…17
15. 第70回日本統計学会総会報告	…17
16. 2000・2001年度第7回理事会議事録	…21
17. 日本学術会議報告	…吉村 功…22
18. 会合案内	…23
19. 修士論文・博士論文の紹介	…25
20. 事務局から	…25

卷頭隨筆

1 義務教育における統計教育

井出 満（大阪産業大学経済学部）

ご承知の方も多いことと思うが、義務教育における統計教育に関する研究を行い、あわせてその推進と普及を目的として活動している団体として、「全国統計教育研究協議会」がある。

この協議会は、知事部局、教育委員会と学校から構成されており、現場の小中学校の先生がメンバーとなり、メンバーの会費によって活動が支えられている。現在メンバー数は650人ほどであり、年々減少傾向にあり、また、原則として全都道府県にあるはずの都道府県の統計教育研究協議会が、現在では31都道府県に存在するに留まっている。

る。

これは、昭和60年度の文部省による情報教育およびパソコンの小・中・高等学校導入の推進、「いじめ」、「大学入試」などの社会問題の発生などの諸要因が影響して、統計教育が義務教育においてやや軽視されるようになってきたためである。

この協議会の歴史を振り返ってみると（詳細については、全国統計教育研究協議会監修 木村捨雄「統計情報教育の理論と授業実践の展開」筑波出版会を参照されたい）、昭和20年代前半に、「統

計協力校」、「調査統計研究校」、そして「統計教育研究校」といった指定校制度が設けられた。その結果、昭和30年には、指定校は38都道府県の441校に達し、全国規模で統計教育を推進していく基盤が確立していった。しかし、最近では、そのような制度もなくなり、また、全国統計教育研究協議会自身の活動も、毎年行われる研究大会あるいは研修会を引き受ける都道府県を決めるのに四苦八苦していたり、組織の維持に汲々としている。

このような実態を改革するには、何よりも組織の充実が必要である。また、それと並行して、統計教育あるいは情報・統計教育の理論構成を確立する必要がある。

義務教育における統計教育の理念は、まず「統計を教える」と「統計で教える」とを如何に融合するかである。また、実践教育から導き出された「あつめる－まとめる－よみとる」の統計的手法は、重要な統計的知識を学ぶプロセスである。

この統計的手法をさらに発展させ、「とらえる－あつめる－まとめる－よみとる－いかす」について、ここで少し詳しく説明しよう。この説明には、よく「八つ手の小葉」の例がよく用いられる。

まず「とらえる」であるが、「八つ手の小葉」みて、小葉が8つでない八つ手があることに驚きを覚える。これは、常に問題意識を持ち、矛盾や疑問を感じ取る鋭敏な感性が必要ということである。

家の周りの八つ手を調べ、小葉の数を数量的に調べる。これが「あつめる」段階であり、統計調査の企画設計を行い、個別の情報を集めるわけである。

次の「まとめる」段階であるが、集められたデ

ータを分類・整理する段階である。小葉数ごとに観測値の頻度を集計し、度数分布表などを作成する。一般には、代表値（平均、モード、メジアン）、散布度、相関係数などの統計値を計算する。

得られた集団の各種の特性から、いろいろと考察を進める。八つ手の小葉は、9小葉が最頻値であり、今までの常識と異なっていることを知る。この他、「9小葉以外のものもある」「奇数葉が偶数葉より多い」などの新しい知見を得る。これが「よみとる」段階である。

「なぜ八つ手は9小葉なのか？」「なぜ小葉数が偶数より奇数の方が多いのか？」などのさらなる探究に進むことになる。このように、得られた知識が疑問を呼び起こし、さらなる課題が生じることになる。得られた知識を「いかす」ことも重要な段階というわけである。

義務教育における統計教育は、「あつめる－まとめる－よみとる」の統計的手法を教えることも大事であるが、「とらえる」および「いかす」から統計手法につなげる「統計的ものの見方および考え方」を教えることが重要である。すなわち、「八つ手の子葉が8枚でないのがあるのは何故か？」「パソコンの普及率が滋賀県で何故全国一位なのか？」といった「とらえる」から統計的手法に進む方法と、「住宅事情を改善するための方策は？」「交通事故を少なくするための方策は？」といった「いかす」から統計的手法に進む方法を理解させることである。

筆者は、微力ではあるが、全国統計教育研究協議会の組織の充実に力を注ぐとともに、「とらえる－あつめる－まとめる－よみとる－いかす」の統計的手法の義務教育における普及に努めたいと思っている。日本統計学会の皆さんのご協力とご指導を切に望む次第である。

2 新理事長就任挨拶



平成14年9月8日に開催された日本統計学会・評議会において、理事長として理事会を2年間運営するようとの要請が私にありました。1931年から数えると既に70年以上の歴史をもつ日本統計学会に属する多くの先生方には、特に小川賞の受賞以来、様々なことをお教えいただいていることを思い起こし、引き受けることにいたしました。

日本統計学会は統計学の理論家と応用各分野の研究者や実務家が出会う貴重な場になっているのではと思い、これまで参加してまいりました。私自身は経済分野・経営分野の周辺にいることが多いこともあり、同じ日本統計学会の会員といつても、実はよく知らない分野も少なくないようです。しかしながら、私の経験した比較的狭い研究の範囲ですら、はじめは無関係と思われた抽象的な数理的理論や全く別な分野で既に発展していた統計的な議論が、私が特に深く関心を持っている分野での新たな展開のきっかけになっていることも少なくありません。明日を切り開くアイデアや方法

国友 直人（東京大学大学院経済学研究科）

がいつも足を運ばない隣の研究報告の会場で見つけられるかもしれませんのです！

日本統計学会に属する多くの会員にとり、学会がより有益な方向へと発展するように、微力ですが理事長として2年間、努力していきたいと存じます。もとより、私一人では何も出来ませんので、皆様方からのご支援とご協力を是非ともお願ひする次第です。

理事長略歴

1950年生まれ、東京大学経済学部卒業、スタンフォード大学大学院統計学科・経済学科卒業（統計学修士、経済学Ph.D.），ノースウエスタン大学経済学科助教授、東京大学経済学部助教授を経て、現在は東京大学大学院経済学研究科教授。

公式ホームページ

(<http://www.e.u-tokyo.ac.jp/fservice/faculty/kunitomo/kunitomo.j/frontpage.kunitomo.j.htm>)

研究分野：統計学、計量経済学、数理・計量ファイナンス、学術雑誌JASA, Journal of Econometrics, Mathematical Finance等に論文がある。

3 前理事長退任挨拶

小西 貞則（九州大学大学院数理学研究院）

平成12年7月に思いもかけず理事長に選任されて、大変とまどいましたが、三浦由己前会長、杉山高一会長そして理事、幹事の先生方にご支援を頂きまして、2年間の任期を満了することができました。ありがとうございました。

2年前の2000年9月に理事会を構成しまして、21世紀に向けて学会として早急に取り組む重点課

題について議論致しました。まず、急速に進む情報化社会の中で、統計学会欧文誌の電子ジャーナル化を実施して、印刷を委託したSciPress社のホームページ (<http://www.scipress.org/>) から自由に閲覧印刷できるようになりました。また、会員相互の情報の交換の場を提供するメーリングリストも開設されました（会報112号6頁をご覧下さ

い)。

さらに、重点課題の一つとして議論したのが、統計関連学会の協調についてでした。この9月に開催されました日本統計学会第70回大会は、統計関連3学会（日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会）の共催で「統計関連学会連合大会」として実施されました。これは、統計科学に関わりのある諸学会が、相互に連携協力することにより、今以上にこの分野の発展と社会貢献が期待できる方向に向け、積極的に協力体制を押し進めることが必要ではなかろうかということからです。実際に議論を始めてみますと次々に問題が持ち上がりつきましたが、3学会に日本分類学会を加えて構成した連絡委員会委員の先生方の大変なご努力

力、ご尽力により問題を一つ一つ解決し、大会を開催することができました。この貴重な経験が今後何らかの形で受け継がれ、役立てばと考えています。さらに、大会のみならず統計関連学会が協調して取り組むことによって、例えば、日本発信の国際的なジャーナルを育てる等、何ができるかを考える必要があるかと思います

現在、高度に発展しつつある情報技術環境の中で、これから、ますます若い会員の皆様方の力が必要となってきます。どうか若い感性で学会を育てて、変革を起こして頂きたいと思います。新理事長の國友直人先生に対しても会員の皆様方のこれまで通りのご支援を、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

4 第7回日本統計学会賞について

4.1 第7回日本統計学会賞（2002年度）

「日本統計学会賞」の第7回受賞者は、五十音順に、

甘利俊一（理化学研究所）

尾形良彦（統計数理研究所）

黒田昌裕（慶應義塾大学）

の方々に決定いたしました。受賞者の皆様には、それぞれ賞状と副賞の時計が贈呈されました。受賞された3名の方々の受賞理由と略歴は以下の通りです。

[1] 受賞者名：甘利俊一氏

略歴：1936年生、1963年九州大学工学部助教授、1976年東京大学工学部教授、1996年理化学研究所国際フロンティアシステム情報処理グループディレクター

受賞理由：情報幾何の方法論から統計的推測の漸近的な構造を解明し、その独創性は世界的にも高く評価されている。情報幾何はさらに数理工学のさまざまな分野において発展がみられるが、この方法論が統計推測に関して創められたことは特筆すべきである。さらに、人工的神経計算論につい

ても優れた業績を挙げ、この分野の創設者の一人として有名である。また最近、活発に展開がされている独立成分分析の理論的基礎研究や、代数特異モデルの構造の解明にも尽力している。

業績：“Differential Geometry of Curved Exponential Families – Curvatures and Information Loss”, Annals of Statistics, Vol.10, (1982), 357-385

“Geometrical Theory of Asymptotic Ancillarity and Conditional Inference”, Biometrika, Vol.69, (1982), 1-17.

[2] 受賞者名：尾形良彦氏

略歴：1947年生、1973年統計数理研究所研究員、1993年統計数理研究所教授

受賞理由：地震学への応用を視野に入れて、点過程解析のための様々な統計手法を開発した。その研究範囲は統計科学の広範な領域におよび、新しいモデルの提案、最尤法にもとづくモデルの同定法、漸近理論、統計科学の分野へのMCMC法の導入、関連するソフトウェアの開発などで画期的成果を得ている。自ら開発したこれらの成果を駆

使して、地震活動の解析および余震活動の予測のための実用的な方法を確立し、これによって、統計的方法の社会的存在意義を高めることに著しい貢献をした。

業績：“Statistical models for earthquake occurrences and residual analysis for point processes”, JASA Vol.83, (1988), 9-27.

“Estimation of the parameters in the modified Omori formula for aftershock frequencies by the maximum likelihood procedure”, J. Phys. Earth, Vol.31, (1983). 115-124.

[3] 受賞者名：黒田昌裕氏

略歴：1941年生、1972年慶應義塾大学商学部助教授、1982年慶應義塾大学商学部教授

受賞理由：多年に亘り、国民経済の成長と発展に関する実証理論分析とそれに不可欠な統計データの体系的整備に取り組んできた。特に分析理論に対応した統計データの整備は、供給面からみた生産統計や需要面から見た消費統計にとどまらず、産業部門別の労働および資本等の生産要素に関するストック統計の詳細な推計によるものである。また、経済成長の基礎的要因である全要素生産性に関する理論モデルの構築と計測に取り組み、日米生産性の比較分析に大きく貢献した。さらに、これら一連の実証理論分析の結果に基づき、日本経済の政策課題に対して適宜、積極的な提言も行ってきた。近年では、日本のみならず地球規模の課題である環境問題にも研究の視野を広げ、東アジア地域における経済成長と環境保全の両立可能性を模索するための持続可能な成長モデルを構築し、それを実現するための政策課題を検討するためにさまざまな政策シミュレーション分析も試みている。この分析の基礎となった東アジア諸国の産業連関表に関する研究活動は、旧来の産業連関分析モデルを理論面で拡充するだけでなく国際統計の体系化に大きく貢献するものである。

業績：“一般均衡の数量分析”，岩波書店（1989）
“Economic Growth and Structural Change in Japan”
MIT Univ. Press（印刷中）

4.2 受賞者のことば

[1] 受賞者のことば

甘利俊一



20世紀から21世紀に移るにつれて、情報を中心に社会が展開するという、情報化が進んできた。情報とはなんだろうか。確かに情報を処理する装置はコンピュータであり、それを運ぶ技術手段はインターネットなどの通信である。しかし情報の中身が問題である。

統計学は情報を扱う学問である。いろいろなデータをもとに、その背後に潜む法則を見出すことを目的にして、確率的なモデルの構築、データを得る方法の設計、推論の方法の体系化などを議論する。学問の体系として、これが永年にわたって構築されてきた。

私は、数理工学を専門とする一学徒である。数理工学とは、工学の方法論であり、平たく言えばいろいろな面白い現象を数理の目を通して体系的に整理し、理論化することである。ところが、多くの面白い現象は確率的な構造を持っている。Shannonの情報理論を見るまでもなく、情報の巻き起こす現象には確率的なものが多い。情報を数理的に論じようとすれば、それは統計学とは無関係ではない。

これに加えて、私は幾何学的な思考に興味を抱いた。要素をばらばらにするのではなくて、そのつながりを論じようとすれば、要素の間の距離など、幾何学が必要になる。情報の分野で幾何学的な理論を打ち立てようという野望を抱いたのである。

どこから手をつけようかとなると、統計学がお手本になる。情報要素を確率分布と考えよう。その集まりは統計的モデルである。連続量パラメタ

ーで指定される統計モデルは幾何学的な空間であり、この上で推論が行われる。この空間に内在する本質的な幾何学はなんなのか、ここが問題である。これを論じていくと、幾何学としても新しい、双対的な接続を持つリーマン空間に行き当たる。

こうして、情報幾何が誕生した。この構造はそれ自体面白いのであるが、しかしそれは統計学の諸問題の解明に役に立たなくてはいけない。面白いもの、本質的なものは、美しくまた有用であるはずだという信念が私にはある。こうして、統計的推論の高次漸近理論、セミパラメトリック推論の幾何学、さらには統計学と情報理論、制御理論、神経回路網を結ぶ問題、そして組み合わせ最適化などにまで、情報幾何は進展していったのである。

この過程で多くの統計学の専門家と知り合いになり、その教えを受けたことは大変幸せであった。私は、大変多くのことを統計学から、そして統計学者から学んだ。それが図らずも、今回の受賞につながった。大変名誉なことと感激している。

世は情報時代である。それについて情報にかかる学問も、パラダイムを変えつつある。この中で統計学はもとより、情報理論、システム理論、神経回路網、人工知能、物理学など、多くの学問が融合して新しいパラダイムを築こうとしている。統計学がこの中で中心的な役割を果たし、更なる発展を遂げて行くことを願ってやまない。

[2] 受賞者のことば

尾形良彦



このたびは伝統ある日本統計学会より学会賞をいただき大変光栄です。これも入会以来、会員諸先輩同僚のご指導お励まし御交誼のお陰様で、これによって小生の研究動機が増幅されたり士気が高揚したりして成果を積み上げることができたものと考えております。特に統計数理研究所の旧上司諸先輩同僚には私の信ずるところの研

究について、寛容性をもって尊重して頂き、さらには御支持お引き立てして頂いたお陰であり伝統ある日本統計学会より学会賞をいただき大変光栄です。統計学の素人同然だった入会時以来、会員諸先輩同僚からは暖かいご指導お励まし御交誼を頂きました。お陰様で私の研究動機や士気が増幅・高揚され、根気強く研究を継続でき成果を積み重ねることができました。また、統計数理研究所の諸先輩同僚には、寛容に私の研究を尊重・支持して頂き、さらには機会あるごとに引き立てて頂きました。流行にとらわれない地域主義的な研究風のものと、国際交流も盛んな理想的な環境で、思う存分研究ができたのは幸運でした。改めて感謝いたします。

さて、統計的方法に関する専門家集団として結成された日本統計学会は早70年の歴史を迎えております。情報化社会と言われるなか各種データが爆発的に増加しています。当然ながら諸科学や情報工学の中で、統計的方法に対する需要が急増しています。しかし日本では、統計学の教育体制の後進性もあって、これに対応する統計科学者や技術者の数が追いつかない状況です。従って情報処理関連学会や応用科学の各学会で統計的解析ができる研究者が輩出せざるを得ません。とくに、これらの意欲的な研究者は、役に立つとあれば統計学の伝統的な成果から最先端の研究まで独学で取り込み、計算プログラムを作成して自分たちの問題に応用しています。そこで創意工夫された統計手法が、当該の学会で成果として認知されている例が散見されます。たとえば私が関わりのある固体地球物理学・地震学では大量の地震波やGPSなどの測地学的数据から地殻断層の破壊過程などの逆問題にかんして大規模ベイズ法が当たり前のように適用工夫され科学的新知見が輩出しています。

このような時代において、会員諸氏がデータの洪水に溢れる各科学分野や情報工学分野に打って出、その関連分野でも経験を積まれ研究交流する気風が満るなら日本統計学会の将来は誠に明るい展望を持つと思います。私も10年も経たずに定年

を迎えるような年齢にありますが、これまで積み重ねた経験を一層活かして統計科学の最前線で闘い続けたいと思います。最後に、改めて、このたびは私にとって節目となる励ましを頂き、優れた成果として評価されている例が散見されます。私が関わっている地震学・地球物理学の学界でも、例えば大量の地震波データやGPSなどの測地データから地殻断層の破壊過程などの逆問題に関して、大規模ベイズ法が当然のように工夫適用され、重要な科学的新知見が輩出しています。

実は、この様な動きは統計科学に対してだけ起きている現象ではありません。21世紀には横断型科学が大きく発展すると言われ、新設既存を問わず互いの学会で守備領域が錯綜し、重複分野も大きくなっています。このような時代においてこそ我々も、データの洪水に溢れる各科学分野や情報工学分野に打って出、単なる道具の提供や解析の手助けに留まらず、その分野での重要な課題は何かを深く理解し、あわよくば我々自身がその様な課題に取り組む気概が要請されているような気がします。この様にして統計的方法を創造的に発展させる努力を積み重ねる気風が漲るなら、日本統計学会の役割は重みを増し、その将来は誠に明るいと思います。今年の合同大会では、その様な方向を探るための会員の便宜を提供しようとする取り組みや交流が始まられたように見えます。

私も10年も経ずに定年を迎えるような年齢にありますので、目標を絞って、地震の統計的予知・予報の実用化を実現する為の諸課題と切り結び、願わくは、後に続く研究の礎をつくりたいと思います。おわりに再び、このたびは私にとって節目となる大いなる励ましを頂き、受賞にご尽力下さった方々をはじめ会員の皆様に厚くお礼を申し上げます。

[3] 受賞のことば

黒田昌裕

このたび、統計学会賞の受賞という栄誉に接し、永年経済の実証分析の中で、統計、とりわけ経済統計を用いて、微力ながら実証科学の発展に寄与



することを目標としてきた努力の成果が認められたことに、大きな喜びを感じております。もちろん、これは、多くの諸先輩のご教示の賜物であり、また多くの方々との共同の研究成果に対する評価であります。諸先輩に御礼申し上げるとともに、研究と一緒に続けてきた多くの方々との共同の栄誉と考え、ともに喜びたいと考えております。

経済現象という直接実験をおこなうかたちの分析手法が困難な領域を分析対象とした場合、通常の経験科学が行う仮説検証の方法とは異なり、諸現象の観察自体が、目前の実験装置ではなく、他の統計作成者の手による観察の結果を用いるという場合が殆どであります。その際、入手した統計資料が、どのような実験計画に基づいて作成されたものであるかを、正確に知ることは、極めて重要になります。別の言い方をすれば、何らかの仮説の検定には、その仮説がもつ実験フレームが必要とされます。その場合両者の実験フレームが正しく対応しているかどうかが大きな問題となります。それぞれの実験フレームには、それを支える実験の理論仮説があるはずですから、統計作成時の理論仮説が検証しようとしている仮説をささえ理论仮説と整合的でない場合には、いかに複雑な手法をもちいても、仮説の検定は徒労に終わってしまうということになります。例があまり適切ではないかもしれません、例えば、「市場の完全競争を仮定して構築した一連の観察資料をもとに、市場の不完全性を検証する」といったことを行っていないかが問題というわけです。また一方で、統計の作成に実験フレームを与える理論仮説が必要とされるわけですから、現象の観察そのものの精度向上には、理論の精度の向上がなければできないという逆の連鎖があることも認識しなければなりません。社会が複雑化し、各種の現象が相互依存的に連鎖をもって生じる場合、そこからの観察事実の統計的な摘出には、統計作成の実験

計画自身が、複雑な社会の構造を具現したものでなければならぬということになります。現象を観察して統計を作成するものと統計を利用して、何らかの現象を解明しようとするものとが分業体制をとらざるをえない昨今の状況では、両者の不整合がしばしば生ずる危険性を持っているということを考えなければなりません。

紀元前のローマ社会すでに、ケルソン（財務官）と呼ばれる人口調査担当の官職があったと言

われています。もちろん単なる人口調査というより、個別の財政状況の調査を目的としたものといえますが、社会の発展には、精度の高い統計の整備が不可欠であり、複雑化した社会であればあるほど、その作成は慎重かつ厳密でなければならないと考えております。受賞者の挨拶として、いさきか大上段のお話になりましたが、日頃考えていることの一端を述べさせていただきました。統計学会賞の授与、改めて厚く御礼申し上げます。

5 新名誉会員の紹介

下記の通り、新しい名誉会員が9月7日の評議委員会にて推挙され、9月9日の総会にて承認されました。

●浅野長一郎（九州大学名誉教授）

推薦理由：浅野長一郎氏は、1950年後半から約45年間の長きにわたり統計理論の研究および統計教育を通じて多くの後進の育成に絶えざる尽力を続けてこられました。とくに、臨床分野における統計手法の利用および統計手法普及に対してのコンピュータ利用の必要性を早くから指摘し、これらに関連する研究に関して多くの業績をあげられると同時に、国内外で臨床統計や計算機統計に係わるプロジェクトを意欲的に組織され、現在に至るまでその牽引役を務めておられる臨床統計および計算機統計領域の第一人者であります。臨床統計の分野において、多重性・非劣性・評価指標の妥当性など、後に医療統計での中心的な課題となり、現在なお広く関心を集めている問題をいちはやく研究テーマとして取り上げ、関連論文として発表すると同時に、諸種の研究会を通して多くの製薬企業の統計担当者への積極的な実践指導を行われてきました。

また、日本統計学会の学会活動としては、評議員を7期務められ、2000年には統計学会賞を受賞されております。国際的にも、ISIの評議員（1992-1997）、IASCの副会長（1991-1996）および評議員（1976-2000）、ARS会長（1993-2000）を

●大屋祐雪（九州大学名誉教授）

推薦理由：大屋祐雪氏の統計学研究の主たる領域は統計調査論であって、昭和30年代には、数理統計学と社会統計学の指導的な研究者が登場する標本調査論争において、調査技術の論理構造とその社会適合性とを明らかにすることによって、論争を1つの理論的な到達点へと導かれました。そして、研究領域を、統計調査論から統計論、統計制度論および統計体系論に拡げられ、社会統計学の現代的課題領域において、高水準の学術論文と著作を発表されることによって、社会科学的な研究分野としての政府統計論の確立と体系化に精力を注がれました。また、社会的な啓蒙活動にも足跡を残し、特に社会経済統計はその重要な部分を政府統計が担っていることから、日本における政府統計のあり方について数多くの積極的な意見を表明、理論と社会の現実のなかで統計学者として数多く貢献されたことは注目に値します。

その間、日本統計学会においては理事および評議員を務め、国際的には国際統計協会正会員、政府関係では学術審議会専門委員、さらには日本学術会議会員（第15期）等に選出されることにより、わが国における統計学研究、さらには学術全般にわたって、その見識と経験を發揮され、統計学界

の振興に並々ならぬ功績を残されました。近年では、統計学会の多くのスタッフを結集した平成8～10年度文部省科学研究補助金重点領域研究（特定領域研究）『ミクロ統計データによる社会構造解析』（研究代表者：松田芳郎）の組織に尽力し、特定領域研究の採択・発足後は、その評価委員長として、統計研究の先進的な領域において、後進の指導にあたられたことは、記憶に新しいことであります。

●永山貞則（日本統計協会副会長）

推薦理由：永山貞則氏は、1947年総理府統計局（現総務省統計局）に入局以来調査部長を経て1981年統計局長に就任し、1983年退官されるまで、主として統計行政に携わり、その間1963年から1965年まで国連統計局に勤務し国際的にも政府統計の分野で活躍されました。政府統計では、全国消費実態調査、全国物価統計調査、社会生活基本調査の実現と実施に力を注がれたことは、知るひとぞ知る氏の業績であります。

氏の活躍は、大学での教育にもその場を広げられ、早稲田大学大学院商学研究科で非常勤講師として経済統計の分野で講義等を行い、官を辞された後は、1985年以来同大学政経学部客員教授（後特任教授）として学部大学院双方において講義等で学生の教育指導をされ、多くの学生や経済統計の研究者を育てられてこられました。

統計局在職中から、物価統計の分野で数多くの論文を発表され、官庁統計家と大学の統計家との双方に刺激を与えられ、いまでは故人となられた森田優三教授をはじめとする大学から官庁統計の世界にも入られた多くの先輩達の後継者として、官庁統計の世界から大学の世界に踏み込まれ両者の融合に力を注がれてこられました。その結果、1996年には、日本統計学会賞と国際統計協会のケトレー賞を受賞されたことでもその業績は学界に広く知られています。ちなみに、国際統計協会では1989年から91年までサテライトのIAOS（官庁統計部会）の副会長の職についておられます。

この政府統計と社会経済実証分析の面での学界と官庁統計界での後進の指導という点では、文部省特定領域研究ミクロ統計研究で評価委員として、大屋祐雪・浅野長一郎諸教授と共に活躍され、政府統計のミクロデータの活用可能性に関して道を開くべく努力されたことにも現れております。

近年は、文化統計という新しい分野にも挑戦され、数多くの論文を発表されており、文化経済学会の創設に努力され、同学会の会長を経て現在顧問に就任されています。

1950年に入会以来半世紀以上に亘り、本日本統計学会の会員であり、その間長期にわたって評議員としても活躍されていることは、多くの会員の知るところであります。

6 日本統計学会小川研究奨励賞

6.1 対象論文および受賞者の報告

宮川雅巳

非巡回的有向グラフ（DAG）で表現される確率モデルは、1920年代に開発されたWrightのパス解析にまでさかのぼることができるが、DAGで成り立つ確率変数の独立性・条件付独立性の理論が精緻化されたのは1990年あたりである。その後から、DAGに基づく統計的因果分析の数学的理論が発展している。その中のひとつの話題としてDAGの復元がある。これは、観測される変数

間の相関関係から背後にあるDAGを推測する問題である。既往の研究成果として、変数間の独立性・条件付独立性の情報のみからでも矢線の存在箇所は識別できること、さらに、いくつかの矢線についてはその向きも同定できることが示され、そのためのアルゴリズムもいくつか開発されている。

本論文で与えた貢献は2つある。1つは、既存の復元アルゴリズムにおいて矢線の向きが定まらない変数対の条件を明らかにしたことである。い

まひとつは、矢線の入ってこない外生変数が先驗的に認識されているとき、DAGが完全に復元されるグラフ構造を明らかにしたことである。これらは、定性的因果知識と定量的相関情報を組み合わせるという統計的因果推論のフレームワークに重要な指針を与えるものと評価される。

黒木 学氏は、1996年に東京工業大学大学院に入学以来、DAGに基づく統計的因果推論について研究を進められ、2001年には学位論文としてその成果をまとめられている。本論文以外にも、同時介入効果の識別可能条件に関する論文、因果効果推定のための中間変数選択基準に関する論文を日本統計学会誌に発表している。我が国におけるこの方面での貴重な人材として今後の一層の活躍が期待される。小川研究奨励賞の受賞者としてまさにふさわしい若手研究者である。

6.2 小川研究奨励賞を受賞して



黒木 学

この度、第16回小川賞を授与され大変光栄に存じます。榮誉ある小川賞受賞という思いもかけぬ吉報に、身が引き締まる思いがしています。この賞を受けることを多くの方々に感謝するとともに、より一層研究に精進していきたいと思います。

東工大大学院において、私は、宮川雅巳先生の

指導のもとで、因果ダイアグラムを用いた統計的因果推論を研究する機会に恵まれました。学生時代から現在に至まで、私が取り組んでいる主なテーマは因果効果の識別可能性問題ですが、統計的因果推論を研究し始めた当初から「データの持つ相関構造から因果ダイアグラムを復元する」という問題は常に脳裏にあるものでした。本論文の結果は、この復元問題に対して一定の指針を与えるもので、私と同様な問題意識を持った菊池智功君（日本HP）、そして私たちの指導教官である宮川先生との共同研究でなければ得ることができなかつたものであると思います。

本研究を行う際に、多くの方々のご支援を頂きました。特に、安部健一君（読売新聞）、森川次郎君（アルバイン）、森山勝行君（農林中金）には、統計的因果推論の研究に関する議論に積極的に加わっていただき、数多くの有益なコメントを頂きました。今にして思うと、彼等との議論や応援がなければ、統計的因果推論に関する研究を積極的に行うことはなかったかもしれません。

今後は、統計的因果推論に関する研究をさらに推し進めていくだけでなく、実質科学の要請に応えるための統計手法の開発を行うべく努力する所存です。今後とも、みなさま方の益々のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略歴：昭和45年7月14日宮崎県日向市生れ。東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程修了、工学博士。東京工業大学大学院社会理工学研究科助手。

7 統計関連学会連合大会（第70回大会）報告

7.1 統計関連学会連合大会実行委員長報告

広津千尋

日本統計学会第70回大会は、9月7日～10日の4日間、明星大学において統計関連学会連合大会として開催された。本大会は応用統計学会、日本計量生物学会との共催、また、日本分類学会協賛の下に挙行され、過去にいくつかの連合大会の例はあるものの、いろいろな意味で最大規模の大会

となつた。

本連合大会の一つの大きな特色は、3学会の単なる同時開催ではなく、企画、プログラム、報告集を完全に一体化し、経費・収入も連合大会の独立採算として運営されたことである。収入・支出のバランスは現在整理中であるが、約650名の有料の参加者を得たこと、大会初日に行われたチュートリアルセミナーにも予想を越える300名近い

参加者のあったこと、計算機ソフトウェアのデモ展示、広告収入等により黒字であることは確かとされている。他方、連合大会のスムースな運営のために実行委員会が組織された。これは従来の開催担当校の概念を打ち破り、明星大学の他、近隣の一橋、成蹊、電通、中央、多摩大学、更に、東京大学、統計数理研究所他の応援を得て、非常に大きなスケールで組織された。この規模の連合大会を挙行するには単一の担当校では難しく、今後のための一つの範例と目される。

連合大会の内容については別に紹介されるものと思うが、各学会から提案された特徴あるセッション、外国招待講演セッション、科研費セッション、チュートリアルセミナー等多彩で、連合大会ならではと思われた。9月8日午後には、シェイクスピア研究で名高い明星大学に因んだ市民講演会「ふるきをたずねて新しきを知る－統計学で温故知新－」が開催され、学術講演とはまた一味違った趣が大変好評であった。

最後に、日本統計学会第71回大会は来年9月に名古屋地区で、応用統計学会、日本計量生物学会との連合、日本行動計量学会との同時開催、かつ日本分類学会および日本計算機統計学会の協賛という形式で行われることが決定されている。同大会が一層の盛況となるよう会員諸氏のご支援を切にお願いする次第です。

7.2 プログラム編成委員会委員長報告

吉村 功

今回参加の3学会は規模がかなり違います。統計学会が約1500人、応用統計学会が約700人、計量生物学会が約400人です。

大会の位置づけも違います。統計学会はこの大会が役員交代と学会運営の公式行事の時期ですが、他の2学会は4月がその時期です。従って、統計学会は総会や学会独自の組織的イベントをこの機会に行うのに対し、他の学会はそうではありません。単純に並列にすると、統計学会のお祭りに他の学会が加わっただけ、という印象を与えてします。そうでないという趣旨を明確に形にす

ることが重要でした。

たとえば、プログラムの案内や講演報告集の体裁はそういう意味で、工夫をしてありますし、市民講演会やチュートリアルセッションに全体の企画という雰囲気を持たせるよう、プログラムを組みました。

プログラム編成の実務面では、統計学会の田中勝人先生の苦労が大変大きなものでした。これによって、編成作業は非常に短い時間で行うことができました。ここに記しておきたいと思います。

今回の経験で、今後工夫しなければならないことがいくつか見えています。第一は、今回は、規模がいろいろ複数の学会が別々に用意した企画と、連合的な企画とを合わせたのですが、将来は最初から連合企画委員会で用意できないかということです。第二は、総会や受賞講演といった学会の組織的な行事を複数学会がやろうとしたときに、会場や日程をどのようにするかです。これは、編集委員会や組織委員会といったもっと小さなレベルでの会合の調整についても言えることです。技術的なことではありますが、一つずつ解決していくなければならないことでしょう。

来年度の連絡委員会で皆さんに工夫していただきたいと思っています。

7.3 市民講演会報告

岩崎 学

初の3学会連合大会を記念して市民講演会が企画され、2002年9月8日（日）の午後3時から5時半にかけ明星大学シェイクスピアホールにおいて以下のプログラムで開催された。

テーマ：ふるきをたずねて新しきを知る

－統計学で温故知新－

主催：日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会

共催：明星大学

協賛：日野市、日本分類学会

参加費：無料

講演者と演題：

・岩崎 学（成蹊大・工）「開会の挨拶－こんな

ところにも統計が！」

- ・竹田正幸（九州大・システム情報科学）「文学作品におけるデータマイニング—デジタル国文学の新展開」
- ・村上征勝（統計数理研究所）「コンピュータで探る名作の謎—シェイクスピア作品、『静かなドン』、『源氏物語』を中心に」

講演会開催にあたっては、市民講演会案内のポスターを作製して近隣の公的機関および高等学校などに配布し、さらに講演会のお知らせを日野市報および朝日マリオンに掲載依頼するなど、市民講演会のみならず統計関連学会の宣伝に努めた。当日の講演会には一般市民の方々および連合大会

参加者などおよそ100名が来場された。各講演内容も、普段の学会とは一風異なり、統計の専門家でなくとも（あっても）分かりやすく興味深いもので、会場にお見えになられた方々の評判は上々であった。

明星大学のご協力によりたいへん立派な講演会場を使わせていただき、連合大会からの補助ならびにポスターおよび当日の資料の作成への科学研修費の援助を受けることで参加費無料の講演会が実現した。関係各位にこの場を借りて感謝します。

なお、当日の講演資料の残部があるので、興味を持たれた方は岩崎（E-mail : iwasaki@is.seikei.ac.jp）までご一報いただければ資料をお送りします。

8 「統計学・確率論とその関連分野についての第4回国際会議」に出席して

景山三平（広島大学大学院教育学研究科）

上記国際会議が、北イリノイ大学（アメリカ合衆国イリノイ州デケルブ市）において平成14年6月14日から16日まで3日間開催された。参加国数は14か国、参加者数は242名で、わが国からの他の参加者に、神保雅一（慶應義塾大学）、武藤幸康（慶應義塾大学）の両氏をみることができる（他にアメリカ在住の日本人もおられた）。昨今の国際状況を考え、あまり参加したくなかったのですが、セッションオーガナイザーとして4名の発表者を招待している責任もありアメリカ国内での乗り継ぎの必要のないルートのフライトを選んでの参加でした。結果的には（大学から電話もありませんし）よい気分転換になり参加して有意義であったと思っています。また会議終了後すぐにシカゴに移動し大リーグの試合（ソーサのいるシカゴカブスとホワイトソックスの対戦）をバックネット裏3階席での寒さの中で興奮して観戦しました。いやー面白ろかった。また17日はシカゴのイリノイ大学を訪問し、神保氏のセミナーにも出席しました。旧交を温めるって楽しいですね。

さて、今回の会議の主体は、国際インド統計協

会（IISA、1989年創設）で統計科学研究に関して中心的な役割を果たし活発な活動を展開している学術的研究者の集合体である。2年毎に世界的規模で統計科学研究が精力的に実施されている場所で国際会議を開催し、多角的な討論や情報交換を行っている。毎回多数の参加者を得て密度のある有意義な国際会議になっている。最近では、1998年度ハミルトン（カナダ）、2000年度ニューデリー（インド）で開催されている。今回は特にインド人ではない参加者の数が多かったとのことでした。統計学は、ここ半世紀の間急速に発展してきた分野で、新しい理論構築と共に多くの応用場面をもっている。この分野の研究の中心の一つであるアメリカでは、活発な教育・研究活動が行われその研究者層は厚い。そのためアメリカにおいてたびたび統計学・確率論に関する国際会議が開催されている。統計科学を目指しているものは実質科学の分野でよく取り上げられるテーマで、多くの研究分野を包括している。とくに今回は特に実験計画法の分科会が一番多く4つあり注目を得ていた。そのため多くの（統計的な側面に興味を持

っている) デザイン研究者が集まり、有意義で密度の濃い直接的な議論がなされた。会議は総合講演を除くとすべて分科会形式で進められ、招待講演が12編(各45分間)、招待論文が177編(各24分)、投稿論文が8編(各25分間)であり、プログラムとアブストラクト集は実に100ページを越えています(せめてセッション名でも列記すればいいのですがあまりにも多く省略します、興味のある方は私が神保氏へ連絡下さい)。景山は二つのセッションの座長と一つのセッションのオーガナイザーであると同時に招待講演者でもあった。基本的には、すべてが事前に招待した者だけによる会議のスタイルのようであった。それでも中には質のよくない発表もあったが、高いものがほとんどであった。

会議の論点は現在進行中の研究動向の確認で(1)各自の最新研究結果の発表と討論(特に理論面の成果を通して)、(2)今まで統計学・確率論で発展してきた研究内容のまとめと将来の展望、(3)未解決問題への緊急貢献の必要性と問題点の整理、であった。私の成果としては、(1)参加者がお互いに自分が研究していること以外の実験計画法研究分野の広さを知り、自分の研究の相対的位置が確認できた、(2)実験計画法研究者が多く集まり、お互い密で直接的な情報交換ができ、新しい共同研究の足がかりができた、(3)種々の実験の応用に関する情報や知見を得た、(4)若い研究者を勇気づける方策についての活動を知ったこと、などである。

研究のための研究ではなく、常に応用を意識した研究姿勢が基本で、実際の問題を解決するための理論構築の研究が多かった。わが国の研究者もこの視点での活動をもっと評価する必要がある。そのためには、理論家と実際家が共同研究できる環境作りが必要である。世界の動向を見ると、興味をもっている人が集まり共同研究し結果を有効に導出している。無論、理論家同士の共同研究を否定している訳ではない。高度情報化社会の中にはあっても、同様な研究テーマをもつ人がいかに密に会える体制にあるかが昨今の研究には必要不可

欠であるが、それが海外では実現されつつあると感じた。日本でも同様な対応が考えられてよい。特に、共同研究プロジェクト方式で研究活動を積極的に進めるべきである。この方が研究上のアイデアが生まれやすい環境をもつことができると考える。

諸外国の現状に関して、実験計画法に係わる分野に限って、本会議での講演の内容と私の今までの研究状況観察結果を合わせて記述する。本会議では14カ国からの参加であったが、諸外国の研究発展状況を十分には把握できていない。実験計画法に関する研究は意外と競争が激しく研究結果の優先性を主張する場合もあり、最近では共同研究のスタイルが主流となってきている。(中国・香港)実際問題に則した問題を主に研究し興味深い。(カナダ、イギリス、フランス)理論と応用に関する研究の融合がうまくいきそのレベルは高くその生産性も高い。(インド、アメリカ)研究者数といい研究の質といい世界的にもレベルがかなり高い。

その他で気づいたことを列記する。(1)多くの会場に分かれての3日間のプログラムを実施したことは、聞きたい話も聞けずあまり適切な運営ではなかった。サマータイムもあるが、朝7時代からの開始には驚いた。とにかくプログラムが窮屈すぎた。この規模での国際会議にしてはパラレルセッションが多くすぎた。(2)各招待論文講演者が24分の講演時間では発表・討論時間が十分に保証されたとは言えなかった。最低45分間は必要であろう。投稿論文講演者の発表時間は25分と1分多くしてあるのが興味深かったので、主催者にその理由を尋ねると、各発表者の重要度を平等にした処置だそうです。この理由分かりますか。また、Student Paper Competition Sessionというものがあり、大学院学生に理論と応用の分野に分かれて論文発表をさせ会場にいる3名の審査員(事前に氏名は公表)で評価し最優秀のものを2日のパンケットの際に表彰したが、これは興味深いことであった。(3)Survival Skills for Young Statisticiansのセッションも興味深く、

NSF/NCI/NIHへの申請書の書き方など研究資金調達の仕方についての話や教育・研究・会議のこなし方に対するアドバイス等がなされた。このような企画は日本の学会でもなされてもよいのではないか。(4) D. Basu Memorial SessionとReminiscences of Professor Shanti Guptaのセッションは人間臭い話が多く、大変興味深いものであった。(5) 昼食は各自が自由に取る方式であったため、大学の外に行く必要があり90分のランチ休憩では不十分であった。濃い討論がその時間に出来なかつた。(6) すべての参加者に対して旅費・滞在費・空港への往復が自己負担(会議登録料に含む)であり、評判が悪かった。基本的に

IISAからのサポートがないようで、登録料がすこし高いのもうなづけた。(7) すべての会場に2つのOHPがあればもっとよかった。国際会議で要領よく発表するためには是非必要である。(8) 学内宿泊場所が2箇所に分かれ不便であった。宿泊代も安くなかつた。(9) 一日目の最後に企画されたピクニックはあいにくの天候で室内に変更されたが、なかなかのインド料理が準備され多くのインド人参加者には好評であった。食べものと言えば、コーヒーブレイク中にも飲み物以外にも様々のものが用意されアメリカでの国際会議では珍しい光景であった。

9 会長候補者推薦のお願い

本年秋には次期会長(2003・2004年)の選挙が行われます。本学会では、会長候補者を会員から推薦していただくことになっております。この趣旨は、一般の会員の参加意識を高めることにあり、1996年9月の評議員会で以下の内容が確認されております。「評議員会での会長候補者の選出に先立ち、会報等により会員に候補者の推薦を求める。推薦は、本人の了解のもとに推薦理由書および略歴、簡単な業績リスト等の資料を添えて評議員会に対して行うものとする。評議員会は、推薦された候補者を参考にして、従来どおり会長候補者1名を選出し、会員に信任投票を求めるものとする。」

次期の会長選挙への会員からの推薦を以下の手順で受け付けます。

1. 推薦の資格は、正会員、名誉会員とし、同一の候補者を複数の会員が連名で推薦することも可能です。
2. 今回の会長選挙のためには、2002年11月5日までに、所定の書式による推薦書類を事務局宛に提出することが必要です。郵送可。ただし、署名、捺印が必要ですので、FAX等の通信は不可とします。
3. 所定の「会長候補者推薦書」は、事務局へご請求ください。推薦理由書(A4用紙1枚)、履歴書(A4用紙1枚)、業績リスト(A4用紙2枚以内)は、書式自由です。

多くの会員の皆様から推薦をいただけることが前提ですので、積極的にご推薦くださるようお願いいたします。

10 研究部会新設公募

統計学の研究活動を助成するため、日本統計学会が1954年に研究部会制度を設けて以来、これまで多くの研究部会が誕生し、統計学の発展に寄与して参りました。この制度は、公募制をとり、原則として年2ないし3件が評議員会の承認を得

て発足します。継続期間は2年間、助成額は1部会につき10万円で、部会設置期間終了時には、会員への研究成果の公表と評議員会への事務報告が義務付けられています。また、研究会の開催を本学会のホームページに掲載することになつていま

す。

募集は毎年行いますので、前年採用された2ないし3部会とあわせて、1年度中に4つから5つの部会が開かれることになります。

今年も研究部会を公募いたしますので、ふるってご応募ください。

締切日：2002年11月6日

応募先：日本統計学会事務局

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所内

応募書類の書式などは事務局までお問い合わせください。採用は、11月に開かれる評議員会にて協議の上、決定いたします。

11 研究分科会について

11.1 日本統計学会研究分科会規程について

杉山高一

2001年12月8日に開催された2000・2001年度第4回評議員会で、研究部会の規定を細則に記し、加えて研究分科会を設けることが、承認されました。条文は下記のようになります。

(研究部会および研究分科会)

1.2. 研究部会および研究分科会を設置することができる。

これに伴い、理事会で研究分科会規程案を作成し、2002年9月7日に開催された2000・2001年度第5回評議員会で報告しました。評議員会ご意見をいただき、一部修正の後下記のように決まりましたので、お知らせいたします。

1. (目的) 研究分科会（以下分科会という）は日本統計学会（以下本学会という）における研究活動を促進することを目的とする。

2. (構成) 分科会は分科会会长及び分科会会員をもって構成する。ただし、分科会会长は本学会員でなければならない。

3. (成立) 分科会は本学会評議員会（以下評議員会という）へ所定の様式に基づいて設置申請を行い、その採択をもって成立する。

4. (期間) 分科会の設置期間は4年とする。ただし、評議員会の承認を得て延長することが

できる。

5. (補助金) 分科会運営の必要経費として本学会は分科会に若干の通信費を支出する。
6. (連絡責任者と連絡先) 分科会の連絡責任者は分科会会长とし、連絡先は原則として連絡責任者の勤務先または住所とする。
7. (事務) 分科会の運営に関する事務は原則として当該分科会において行う。
8. (報告) 分科会会长は2年毎に、過去2年間の分科会の研究経過ならびに成果に関して評議員会に報告するものとする。
9. (公表) 分科会の研究会は本学会会員に公開するものとし、その開催予定を会報やホームページ等を通じて会員に知らせるものとする。また、寄与した成果について、会報やホームページ等に報告を掲載して広く会員に公表するものとする。
10. その他本学会の会則、細則に規定した事項は守らなければならない。

その後、何人かの会員の方から、第1項（目的）の「研究活動を促進し…」は学会会則第3条に合わせて「統計学の研究および普及を促進し…」の方がよいのではないかとの意見をいただきました。これについては11月9日（土）に行われる2002・2003年度第2回評議員会で御検討いただき了承いただけましたら、そのように変更したいと思います。

11.2 研究分科会募集のお知らせ

杉山高一

研究分科会の運用基準が決まりましたので、分科会の新設を募集いたします。新設を希望の方は分科会名、趣旨、分科会会长名、分科会会員名、連絡先を記入し、11月6日（必着）で統計学会事務局までお送り下さい。11月9日（土）の評議員会で審議いたします。尚、若干の通信費を支給するトありますが、その額については理事会でご検討いただき、それぞれの研究分科会会长にお知らせいたします。

研究分科会は、統計学会のサーバを活用し、分科会会員の研究成果を発表する場として、e-journalを発行すること等ができます。統計学会のホームページに載せるだけでなく、作成されたe-journalは科学技術事業団が無料で提供している科

学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE）にも載せることができます。世界中の誰でもスムースにJ-STAGEのe-journalにアクセスすることができます。このように世界に成果を発信するのであれば、数人によるレフリーシステムを構成し、ある水準以上の論文をe-journalに載せることを考えられたらよいと思います（日本語による論文も載せることができます）。

統計分科会は会員以外の方にも大いに加わっていただき、その活動を通して統計学の研究および普及の促進に寄与することを期待しています。上記締め切りの11月6日に間に合わなくても、研究分科会の募集は隨時行っていますので、いつでも応募してください。ただし、評議員会は年に2、3回ですので、申請いただいたてから承認まで時間がかかるなどをどうぞ了承下さい。

12 科学研究費への応募促進について

竹村彰通（東京大学）、赤平昌文（筑波大学）

今年も科学研究費の応募の時期となりました。昨年度から会報等でお知らせしておりますように、今年度までの複合領域の分科であった「統計科学」が、来年度にむけての申請からは、総合領域の情報学分科の中の一つの細目となりました。統計科学は赤池弘次先生をはじめとした先人の努力により分科としてたてられたもので、このような結果となった事は残念なことですが、その一つの原因は統計科学への申請件数が少なかったことがあります。

研究資金の流れが競争的資金へとシフトしつつある中で、科学研究費の獲得は、統計研究者の集団の存在を認識させるという意味も持っており、極めて重要です。申請の資格を持った統計研究者は統計科学への応募を是非ご検討ください。すでに科学研究費をとっておられる方も、萌芽研究へ

の応募などの可能性がありますので、こちらもあわせてご検討ください。なお、統計科学が細目になるに伴って、審査員は必ずしも統計関係者とは限らなくなりますので、申請書を作成する際には、統計関係以外の方々にも理解できるような申請書の書き方が望されます。

なお、統計研究者の中には「経済統計学」あるいは「数学一般（含確率論・統計数学）」に応募される方もおられると思われます。研究者の関心に応じてこれらの分野への応募もご検討いただくようお願いいたします。

平成15年用の公募要領などの書類は、日本学术振興会の科学研究費のホームページ
<http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/index.html>
から入手することができます。

13 2002・2003年度評議員選挙結果

2002年7月24日、統計数理研究所において選挙管理委員、加藤剛、南美穂子の両氏により開票が行われました。その結果、定員規定により下記の40名が2002・2003年度の評議員に選出されました。

(なお、有権者1372名中、有効投票者数は143名、延べ記名数661、内有効661、無効0)

岩崎 学 氏家勝巳 大戸隆信 景山三平 勝浦正樹 鎌倉稔成 北川源四郎 国友直人 栗原考

次 西郷 浩 坂本慶行 佐藤 学 柴田里程
清水邦夫 清水雅彦 杉浦成昭 瀬尾 隆 田中豊
田村義保 垂水共之 寺崎康博 道家咲幸
富澤貞男 西井龍映 濱砂敬郎 棚口知之 広津千尋
福井武弘 藤井光昭 藤澤洋徳 舟岡史雄
牧野都治 南美穂子 宮岡悦良 森 博美 柳川堯
美添泰人 若木宏文 渡辺則生 渡辺美智子
(以上40名、50音順)

14 韓国統計学会誌定期購読のお知らせ

日本統計学会と韓国統計学会は、お互いの欧文誌を特別価格（日本統計学会会員個人向2,500円／年）にて提供することになりました。国際交流にぜひ御利用ください。韓国統計学会誌（Journal of the Korean Statistical Society）は1年間で4号が発行され、1号あたり平均150ページというボリュームです。詳細は韓国統計学会ホームページ（<http://www.kss.or.kr/>）をご覧下さい。

ご希望の方は、日本統計学会事務局まで氏名

（または機関名）と郵送先をお送り下さい。折り返し振込用紙をお送りしますので、その振込用紙の学会誌という項目に韓国とお書き加えの上、所定の金額をお振込みください。なお、図書館等の機関向けには13,000円／年で提供させて頂きます。

また、日本統計学会誌は、機関向けには9,450円／年で提供していることも、合わせてお知らせさせて頂きます。詳しくは事務局へお問い合わせください。

15 第70回日本統計学会総会報告

日時：2002年9月9日（月）13：10-14：00

場所：明星大学大学会館第2会議室

開会：小西貞則理事長

1. 会長挨拶：杉山高一会長より連合大会開催関係者への感謝の言葉が述べられた。
2. 議長選出：早川毅会員が議長に選出された。
3. 2001年度事業報告、同決算報告および会計監査報告：土屋隆裕庶務会計担当理事より、資料（付表）に基づいて、事業報告案および決算報告案の説明が行われ、引き続いて濱砂敬郎監事より会計監査報告がなされ、承認された。
4. 評議員会からの報告：小西理事長より、統計

学会欧文誌の電子ジャーナル化、SciPress社のホームページ上の無料公開、海外購読の促進、会員相互の情報交換の場としてのメーリングリストの新設、韓国、台湾を中心とした国際交流の促進、研究分科会設立に伴う分科会規定の設定、などについて報告された。また、新理事長として国友直人評議員が選出されたことが報告された。

5. 2002年度事業計画、同決予算について：土屋庶務会計担当理事より、資料（付表）に基づいて、事業計画案および予算案の説明が行われ、承認された。
6. 第71回大会について：小西理事長より、2003年度の大会は、日本統計学会、応用統計学会、

2001年度事業報告

(2001.4.1～2002.3.31)

1. 日本統計学会第69回大会の開催

2001年9月1日、2日、3日、4日間にわたり、東洋大学の担当で同大学において開催した。期間中の9月1日には第9回セミナーを開催した。

2. 第69回大会講演要旨集を発行した。

3. 会誌の発行

Vol.31, No.1 (6月)改文誌), No.2 (12月), 改文誌), No.3 (12月), 改文誌) を発行した。

4. 会報の発行

No.108 (6月), No.109 (10月), No.110 (1月) を発行した。

5. 第6回日本統計学会賞を山中道雄氏に授与した。

6. 第15回日本統計学会小川研究奨励賞を紙屋芳彦氏に授与した。

7. 研究部会の活動

次の2つの研究部会が予定期に終了した。
「環境データの解析」(清水部大上倉：1999年11月発足, 2001年11月終了)
「データマイニングにおける統計的手法と実際」(鈴木公成上倉：1999年11月発足, 2001年11月終了)

また、次の4つの研究部会が活動中である。

「統計分野におけるインターネットの活用」(森裕一上倉：2000年11月発足, 2002年11月終了)
「統計分野における統計教育の研究」(丸山久美子上倉：2000年12月発足, 2003年11月終了)
「QOL測定尺度構成の研究」(丸山久美子上倉：2001年12月発足, 2002年11月終了)
「電子社会における統計教育のあり方に関する研究」(村上征勝上倉：2001年12月発足, 2002年11月終了予定)

8. 各種委員会の活動

「QOL測定尺度構成の研究」(丸山久美子上倉：2001年12月発足, 2003年11月終了予定)
「電子社会における統計教育のあり方に関する研究」(村上征勝上倉：2001年12月発足, 2003年11月終了予定)

9. その他

（i）国際交流を促進する。

（ii）インターネット経由での情報発信をさらに促進する。

（iii）統計関連学会の連携を進めめる。

（iv）会員マトリックリストを構築する。

（i）会員名簿を発行した。

（ii）改文誌の出版社をSciPressに変更し、電子化を始めた。

（iii）編集委員への外刊への起用、海外研究者による大会招待講演の実施等、国際交流の推進に努めた。

（iv）統計関連学会連合大会の開催に向け準備を進めた。

（v）インターネット経由での情報発信の促進に努めた。

2002年度事業計画

(2002.4.1～2003.3.31)

1. 日本統計学会第70回大会の開催

2002年9月1日、2日、3日、4日間にわたり、明治大学において開催する、今回は統一開催した。期間中の9月1日には第9回セミナーを開催する。

2. 第69回大会講演要旨集を発行

3. 会誌の発行

Vol.31, No.1 (6月)改文誌), No.2 (12月), 改文誌), No.3 (12月), 改文誌) を発行する。

4. 会報の発行

No.112 (7月), No.113 (10月), No.114 (1月) を発行する。

5. 貢献賞

第7回日本統計学会賞、第16回日本統計学会小川研究奨励賞を授与する。
統計部会の活動

6. 研究部会におけるインターネットの利用

「統計系野における統計的分析と企画」(森裕一上倉：2000年11月発足, 2001年11月終了)
「データマイニングにおける統計的手法と実際」(鈴木公成上倉：1999年11月発足, 2001年11月終了)

また、次の4つの研究部会が活動中である。

7. 統計分野におけるインターネットの活用

「統計分野における統計教育の研究」(丸山久美子上倉：2000年12月発足, 2003年11月終了)
「電子社会における統計教育のあり方に関する研究」(村上征勝上倉：2001年12月発足, 2002年11月終了予定)

8. 各種委員会の活動

「QOL測定尺度構成の研究」(丸山久美子上倉：2000年11月発足, 2002年11月終了予定)
「電子社会における統計教育のあり方に関する研究」(村上征勝上倉：2001年12月発足, 2003年11月終了)

9. その他

（i）国際交流を促進する。

（ii）インターネット経由での情報発信をさらに促進する。

（iii）統計関連学会の連携を進めめる。

（iv）会員マトリックリストを構築する。

（i）会員名簿を発行した。

（ii）改文誌の出版社をSciPressに変更し、電子化を始めた。

（iii）編集委員への外刊への起用、海外研究者による大会招待講演の実施等、国際交流の推進に努めた。

（iv）統計関連学会連合大会の開催に向け準備を進めた。

（v）インターネット経由での情報発信の促進に努めた。

2001年度決算

〔2002年〕

(2001年度決算・注)

- 1) 9月16日付にて、朝日新聞の報道により、本件は虚偽記載ではないと、むしろ虚偽記載ではないといふべきである。本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。
- 2) 本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。
- 3) 本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。
- 4) 本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。
- 5) 本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。
- 6) 本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。
- 7) 本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。
- 8) 本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。
- 9) 本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。
- 10) 本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。
- 11) 本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。
- 12) 本件は、(1)虚偽記載ではない。(2)虚偽記載ではない。(3)虚偽記載ではない。

〈2002年度予算〉

卷之三

總計		資本		貨物		費用	
年	月	年	月	年	月	年	月
民 國	三 年	一 九 三 零	一 九 三 零	一 九 三 零	一 九 三 零	一 九 三 零	一 九 三 零
西 南 事 變	年 終	資 本	利 潤	貨 物	運 費	費 用	盈 餘
現 金		4,331,474	2,056,397	75,000	1,000	2,450,507	5,630,944
銀 票		18,234	12,035	80,000	10,000	200,000	300,000
帳 戶	年 終	9,611,165	9,611,165	0.00	0.00	1,400,000	1,400,000
預 付	年 終			帳 款	運 費	1,830,000	1,830,000
				帳 款	運 費	1,181,674	11,688,411
				11,688,231	11,688,231		

（一）收入		（二）支出	
科	金額人合	科	金額人合
公費收入	1,158	各項公費	9,821
		官生公費	531
		圖書品項	709
督辦處人資	1,120		1,420
印務公印資	120		120
督辦處公印資 印務處公印資	300		800
審計科	1,405	公事關說費	700
		49人職人	5
		12人職人	700 ^b
人公關費	700		700 ^a
			16,685
	41		

2018年度竹林業 生

10

2) 運行人会が原則として出発を停止するため、公共交通機関はまことに運営している

後半の会から連絡を取らぬ分野として出し、連合会終了後は連絡を取らぬ方

3 総合と分離などを運営の発達、財團化など。

中華書局影印
新編全蜀王集

5) 毎年定期的に巡回試験の結果を公表する。

三

1

日本計量生物学会の3学会が統計関連学会連合大会として開催し、日本行動計量学会が、開催時期と場所を同じくする同時開催とし、2003年9月2日から5日に名城大学で開催する案が示され、承認された。

7. 名誉会員について：杉山会長より、評議員会において3名（浅野長一郎氏・大屋祐雪氏・永山貞則氏）が名誉会員候補者として推薦された

ことが紹介され、承認された。

8. その他：杉山会長より、日本統計学会賞受賞者3名（甘利俊一氏・尾形良彦氏・黒田昌裕氏）が受賞理由とともに紹介され、引き続いて、授賞式が行われた。日本統計学会小川研究奨励賞受賞者（黒木学氏）が受賞理由とともに紹介され、引き続いて、授賞式が行われた。

16 2000・2001年度第7回理事会議事録

2000・2001年度第7回理事会議事録

日時：2002年7月23日（火曜日）12：00－15：30

場所：統計数理研究所特別会議室

出席者：会長：杉山高一 理事長：小西貞則

理事：北川源四郎、矢島美寛、岩崎学、田中勝人、瀬尾隆、国友直人、土屋隆裕、藤澤洋徳

統計学会会員に日本円で個人的に販売する場合には年間2500円とすることが承認された。また、図書館や研究室単位の場合には13000円で販売したいという韓国統計学会の販売価格が報告された。

<議題2>2001年度事業報告案及び決算案・2002年度事業報告案及び予算案

土屋庶務会計担当理事より2001年度事業報告案及び決算案について説明がなされた。藤澤庶務会計担当理事より2002年度事業報告案及び予算案について説明がなされた。審議の結果、小修正の後に承認され、評議員会および総会へ諮ることが決まった。

<議題3>小川研究奨励賞

北川欧文誌編集担当理事より選考委員会の選考経過および審議結果について報告がなされ、受賞対象論文1編を選考した旨、報告がなされた。

<議題4>学会賞・小川研究奨励賞の賞状等について

矢島理事が、昨年と同様に担当することとなつた

<議題5>評議員会と総会の議題

資料に基づいて議題の検討が行われた。

<議題6>横断型基幹科学技術研究団体連合について

小西理事長より、平成14年5月24日に第一回横断型学会連合準備委員会が開催され、規約案等について検討がなされたとの報告があった。

続いて「横断型基幹科学技術研究団体連合」規約案が示され、趣旨等について説明があった。

＜議題7＞各種賞の新設

教育賞、Year Best Paper Award（最優秀論文賞）、奨励賞、Best Presentation Student Award（最優秀研究報告賞）、功績賞、などの賞の新設をすることが検討された。大会に学生セッションを設けることも討議された。今期の評議員会に報告し、次

期評議員会で検討されることを申し送ることにした。

＜議題8＞研究分科会の新設

新たな研究分科会の新設について議論された。審議の結果、再検討して頂くとともに、分科会に関する規程を作ることにした。

＜議題9＞統計関連学会連合について

今後の大会開催を含めて統計関連学会連合について議論が行われた。

（文責：藤澤洋徳）

17 日本学術会議報告

2002年7月20日

第4部会員統計学研究連絡委員会担当 吉村 功

4月16～19日にかけて、総会が開かれました。主要議題は、「日本の計画」の案文作成、日本学術会議の自己改革、自己評価でした。議論でのやりとりのある種の面白さを別とすれば、統計学関連研究者の方々に報告したくなることはありませんでした。学術会議に限らないことでちょっと気になったことがあります。自己評価と外部評価の必要性が強調される中で、研究・教育といった本質的なことと別な、事務的な仕事が増えていくことです。たとえば、「研究連絡委員会の自己評価を送ること」という指示があり、後に添える内容の評価書を送らざるを得ませんでした。これらは委員会の反省材料になりますし、これを公表することでどんなことをしているかが外部から分かります。しかしその内容がそのために費やされる時間と労力に見合うものかどうかを考えると、学術会議などではこんなことをさせないで欲しい、と感じます。いかがでしょうか。

日本学術会議の自己評価

平成14年7月15日

様式2 研究連絡委員会、専門委員会、小委員会

1. 委員会：統計学研究連絡委員会
2. 構成委員数：会員 7名、非会員 7名（内訳）
所属：教育・研究専門機関 7名（男 6, 女 1）
3. 評価代表者名：吉村 功
4. 委員会今期活動目標：1. 統計学関連学会の協調を強めること。2. 統計科学のフロンティアの拡大。3. 統計学教育の進め方の検討
5. 活動目標を選択した理由について、自由にお書き下さい。：1について：それぞれの歴史的経緯があって作られた統計学関連学会において、近年、医学薬学生物学関連の方法論の構築と応用、官庁統計データの活用、社会科学への統計的方法論の活用、大規模環境データの解析、コンピュータ利用手法など、共通の問題意識のものが多くなっている。そこで学術大会の共同開催、英文学会誌の共通発行、国際連携等で協調を進めることができが望ましくなっている。2. 上に例示した共通課題は現在社会が解決を強く求めている課題でもある。そのような課題は統計学のフロンティアを拡大することではじめて解決への道筋が作られるものである。3. 課題が多くあるときにはそれに取り組む人材も多く必

要で、それを養成することが必要である。

6. 目標の達成方法について、ご自由にお書き下さい。：最初に委員における討論を行った後、関連学会の責任者（会長等）をオブザーバーとして招き、可能性の検討を行った。さらに、委員のそれぞれの学会での立場に基いて、いくつかの学会間での部分的な協調を進展させるよう働きかけている。
7. 委員会開催回数：5回。ただし、この会合は、全体の対面委員会であり、この間には、メールによる意見交換と委員長・幹事の会合が開かれている。
8. 委員会出席者数（オブザーバー、傍聴者は外数）：第1回 11人（オブザーバー 0人）第2回 9人（オブザーバー 0人）第3回 9人（オブザーバー 0人）第4回 8人（オブザーバー 5人）第5回 9人（オブザーバー 3人）
9. 活動の成果：日本統計学会、日本行動計量生物学会、応用統計学会、日本計量生物学会、日本計算機統計学会、日本分類学会、日本数学会統計数学分科会の学会誌、機関誌等に、日本学術会議での議論を報告した。これらの組織に対して、協調のための企画、たとえば「日本統計科学連合設立趣意書案」等を送り、検討の基盤を用意している。
10. 学・協会との連携：上記各学会といろいろな

機会に検討を行っている。

11. 活動の公開状況：日本学術会議報告を総会の度ごとに各学会に送っている。これらは、各学会の機関誌上に掲載されている。
12. 目標の達成状況：統計学研連の表だった企画というわけではないが、平成14年度には、日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会の3学会で、年次大会を合同して行うことが実現した。さらに、平成15年度には、日本行動計量学会を含めた4学会の連合大会の試みが検討されている。
13. 目標達成の阻害要因について、ご自由にお書き下さい。：統計科学のフロンティアの拡大について、個別の研究としては部分的な発展があるが、統計学研究連絡委員会という形式での企画を組むことには、関連学会の同意が得られていない。統計学教育の方法論については、理数教育一般での困難と同様、学生等の生活経験が乏しくなっていることが大きな原因になっているため、特段の工夫が試みられない状況である。
14. 成果の評価：まだ成果を議論する段階に至っていない。
15. 評価結果に基づく改善案：今後とも課題の達成に努力したい。
16. 所属組織による評価について、ご自由にお書き下さい。：所属組織が何を意味するか不明である。もし、統計学研連を意味するのであれば、期末の委員会で検討する予定である。

18 会合案内

■ 科学研究費による研究集会の案内

科研費基盤（A）（1）によるシンポジウムおよび科研費基盤（B）（1）によるシンポジウムの開催についてお知らせいたします。なお、筑波大学数学系数理統計学分野のホームページ内にこれらのシンポジウムの詳細な情報があります。今後の変更や更新情報等も随時掲載していただく予定です。アドレスは<http://www.math.tsukuba.ac.jp/~kunihiko/toukei/symposium.html>となっております。ここでは、シンポジウムのタイトル、時期、

場所、連絡先などに限りお知らせいたします。

科学研究費：基盤研究（A）（1）「量子推測理論の数理統計学の基礎とその応用」（研究代表者：赤平昌文、課題番号14204006）によるシンポジウム

「実験計画とその周辺における数理構造の解明とその応用」

研究分担者：景山三平（広島大）、三嶋美和子（岐阜大）

日時：2002年11月7日（木）14：00～9日（土）

13：00

場所：浜名湖かんざんじ温泉ホテル鞠水亭

〒431-1209 静岡県浜松市館山寺町398

TEL 053-487-0531 FAX 053-487-1402

URL <http://www.kikusuitei.co.jp>

問い合わせ先：三嶋美和子

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1

岐阜大学工学部応用情報学科

E-mail：miwako@info.gifu-u.ac.jp

Phone & Fax : 058-293-2761

「統計的逐次推測理論とその応用」

研究分担者：磯貝英一（新潟大・理），小池健一（筑波大・数学）

日時：平成14年11月13日（水）～11月15日（金）

場所：新潟大学大学院自然科学研究科

総合研究棟（情報理工系）401室

問い合わせ先：

小池健一

〒305-8571 つくば市天王台1-1-1

筑波大学数学系

TEL (0298) 53-4229

FAX (0298) 53-6501

E-mail：koike@math.tsukuba.ac.jp

「バイオスタティスティックスの数理的基礎」

研究分担者：吉田朋広（東京大学大学院数理科学研究科），阪本雄二（広島国際大学人間環境学部），井元清哉（東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター）

日時：平成14年12月5日（木）～12月7日（土）

場所：東京大学大学院数理科学研究科大講義室

ホームページ：

<http://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~nakahiro/sympo14.htm>

問い合わせ先：吉田朋広

〒153-8914 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院数理科学研究科

phone and fax : 03-5465-8335

e-mail：nakahiro@ms.u-tokyo.ac.jp

科学研究費：基盤研究（B）(1)「統計的領域推定における精確な推定方式の開発と実用化の試み」（研究代表者：赤平昌文、課題番号12554002）によるシンポジウム

「計算機指向の統計手法の理論とその応用」

研究分担者：田栗正章（千葉大），今野良彦（千葉大），汪金芳（帯広畜産大）

日時：平成14年12月20日（金）～12月21日（土）

場所：千葉大学けやき会館

講演申込期限：11月15日（金）

申込先および問い合わせ先：今野良彦

〒263-8522 千葉市稻毛区弥生町1-33

千葉大学理学部

email：konno@math.s.chiba-u.ac.jp

tel（今野研究室）：043-290-3663

fax：043-290-2828

予稿送付期限：11月25日（月）

■ 会合案内

2002年12月

* 12.5-7：第4回IASC-ARS釜山大会

テーマ：e-Statistics for Information Society

場所：大韓民国釜山市海雲台 The Westin Chosun Beach Hotel

<http://ars.ssu.ac.kr/>

2003年7月

* 7.7-10：INTERNATIONAL MEETING OF THE PSYCHOMETRIC SOCIETY (IMPS-2003)

Chia Laguna (CAGLIARI), ITALY

<http://www.imps2003.unina.it/>

2003年8月

* 8.13-20：The 54th ISI (International Statistical Institute) Session

Berlin, Germany

<http://www.isi-2003.de/>

サテライトミーティングも多数計画されています。詳しくは上記ホームページをご覧ください。

19 修士論文・博士論文の紹介

修士論文・博士論文の紹介を、(1) 氏名、(2) 学位名、(3) 取得大学名、(4) 論文タイトル、(5) 主査名、の順で記載します。

修士論文

(1) 大和田章一, (2) 修士(理学), (3) 筑波大学大学院数理物質科学研究科数学専攻, (4) 統計的試行における3処理割り当て実験について, (5) 赤平昌文

(1) 谷尾高志, (2) 修士(理学), (3) 筑波大学大学院数理物質科学研究科数学専攻, (4) 逐次2項標本抽出計画における不偏推定可能性について, (5) 赤平昌文

(1) 柳沼伸之, (2) 修士(理学), (3) 筑波大学大学院数理物質科学研究科数学専攻, (4) 超幾何分布の近似について, (5) 赤平昌文

(1) 根岸美佳, (2) 修士(理学), (3) 筑波大学大学院理工学研究科数学専攻, (4) Tests of normality and prediction procedures with decisions, (5) 赤平昌文

(1) 矢野亮, (2) 経済学修士, (3) 東京大学経済学研究科経済理論専攻(統計学コース), (4) 時空間地域計量モデルの構築及び政策効果の分析, (5) 国友直人

(1) 小高雄一, (2) 経済学修士, (3) 東京大学経済学研究科経済理論専攻(統計学コース), (4) 價格における消費者の異質性について: Hierarchical Bayes Modelによる分析, (5) 阿部誠
(1) 李建平, (2) 経済学修士, (3) 東京大学経済学研究科経済理論専攻(統計学コース), (4) Comparison of MLE and LSE in Weibull Proportional Hazard Model(ワイブル比例ハザードモデルの最尤推定と最小二乗推定の比較), (5) 竹村彰通

博士論文

(1) 津田美幸, (2) 博士(理学), (3) 筑波大学大学院数学研究科, (4) The Bioequivalence Problem and the Quantum Estimation, (5) 赤平昌文

(1) 飛田英祐, (2) 博士(理学), (3) 筑波大学大学院数学研究科, (4) Statistical Interval Prediction and Approximations to the Discrete Distributions, (5) 赤平昌文

(1) Yong-Jin Kim(キム・ヨンジン), (2) 経済学(博士), (3) 東京大学経済学研究科経済理論専攻(統計学コース), (4) An Econometric Analysis of Japanese Derivatives Market(日本の派生証券市場の計量経済分析), (5) 国友直人

20 事務局から

投稿のお願いとお知らせ

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて1,000字以内をめどに原稿をお送りください。

来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内(教官公募)なども受け付けております。また、修士論文・博士論文の紹介を行います。(1) 氏名、(2) 学位名、(3) 取得大学名、(4) 論文タイトル、(5) 主査名(指導教

員)、(6) 連絡先(e-mailアドレス)をお送り下さい。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル(テキスト形式)の送付をお願い致します。

原稿送付先

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
立教大学社会学部産業関係学科 山口和範宛
Tel: 03-3985-2325(ダイヤルイン)

Fax : 03-3985-2833

E-mail : kaiho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

統計関連学会連合大会報告集販売のお知らせ

2002年9月に明星大学で開催されました統計関連学会連合大会（第70回統計学会大会）の報告集を販売しております。送料込みで3000円の金額です。購入希望者は学会事務局にお問い合わせください。

訃報

次の方々が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

林 知己夫名誉会員（2002年8月6日）
赤羽根 孝会員（2002年3月22日）
森口 繁一会員（2002年10月2日）

退会者

松村一隆、平松 悠、吉寺雅美、坂田利行

現在の会員数（2002年10月1日現在）

名誉会員	25名
正会員	1353名
学生会員	188名
総計	1566名
賛助会員	22法人
団体会員	3団体

・統計関連学会ホームページ URL :

<http://www.jss.gr.jp>

・住所変更連絡用e-mailアドレス :

jusho@jss.gr.jp

・広報連絡用e-mailアドレス :

kaiho@jss.gr.jp

・その他連絡用e-mailアドレス :

jimu@jss.gr.jp